

『夢喰いの夢』

著: chi-co

ill: 明神 翼

彼らの側をゆっくりと通ると、ちらりと浅見が視線を向けてくるのがわかった。相変わらず感情のない、冷たい目。

それを見て、志信は思わず言ってしまった。

「早いね」

「……」

志信から話しかけたことで、浅見は一瞬驚いたように目を見張ったが、直ぐに目に力を入れて睨んでくる。お前が話しかけるなど言いたいのかもしれない。

しかし、こうして少しずつでも話していれば、ずっと嫌い続けるのは難しいのではないか。

(……やって、みょうかな)

浅見と、これきりになるのは嫌だった。以前ほどではなくても、ただの顔見知り、同じ講義を受ける人間として認めてほしい。

泣いて不(ふ)貞(て)腐(くさ)れるのは簡単だが、志信はどうしても諦めきれなかった。

中学生の時に転校していった浅見と、再び会えるとは思わなかった。それが、こうして再会したのだ。せめて、工藤志信という知り合いがいたというふうにしたい。

伯父のように、何もかも諦め数十年を過ごしたくなかった。

そう思ってから志信の気持ちの切り替えは早かった。

「おはよう」

「……」

挨拶しても返らない返事に落ち込まなくなった。

「寒いな、今日は」

独り言ではない証拠に浅見の顔を見て言い、彼がこちらを見てくれたら嬉しくて笑って、見てくれなくても自分の行動に満足した。何もしないでずっと落ち込んでいるより、何かをしたという事実があるだけでもよほどいい。

ただ、予想外の反応もあった。

「お前さ、何浅見にちょっかいかけてんの？」

「え？」

浅見の取り巻きたちが志信を取り囲んで文句を言ってきた。以前から浅見が志信に構うのが面白くなかった連中だ。元々派手な彼らと、どちらかといえば地味でおとなしい志信はまったく相反する属性として敵視していたのかもしれない。

そんな中で浅見が突然志信と決別して自分たちのグループに戻ってきたことを歓迎したが、性(しょう)懲(こ)りもなく志信が浅見に声を掛け続けることが煩(わずら)わしいのだ。

別に一緒に遊ぼうと思っているわけではないし、浅見が反応しない限り二言目は掛けていないのだが、どうやらそんな志信の線引きを相手はわかってくれないようだ。

「別に、ちょっかいかけてるつもりはないけど……」

「はあ？」

「挨拶してるだけ」

それさえも駄目だと浅見が言うのなら引き下がるが、周りがいくら言ってもそれが浅見の真意だとは限らないので頷くことはできない。自分より背が高く、髭(ひげ)を生やしたりピアスをしている連中に囲まれるのは内心怖かったが、それでも志信はなんでもないふうを装って言い返した。

志信の外見だけを見て簡単に引き下がると思っていたのか、その反応に男たちは小声で何事か言い合っている。

(ま、まさか、殴られるとか、ない……よな)

学校内の、普段学生があまり使わない階段ホール。そんな場所に言われるままのこのこついていった自分の考えなさに今さらながら後悔しても遅い。

肩掛けの鞆を胸に抱えて無意識に身体を防御していると、

「何やってんだ、お前ら」

呆れたような、威(い)嚇(かく)するような声が響いた。

その場にいた志信や相手の男たちが一(いっ)斉(せい)に声がした階段の下の方へ視線を向けると、そこから一人の男の姿が現れる。加瀬だ。

偶然なのか、それとも予定通りなのか。志信と一緒に驚いている男たちを見ると、多分想定外の登場だったのではないかと思った。

「……お前ら、大学生にもなって呼び出しってなんなの？」

「加瀬……」

「お、お前だって、こいつと浅見がつるんでるの面白くないって言ってただろっ」

自分たちの目的を告げて加瀬の援護射撃を期待したらしいが、当の加瀬は志信にちらっと視線を向けた後直ぐに男たちを振り返り、「だせえ」とあからさまに呟いた。

「俺、数で相手威嚇すんの、嫌いなんだよね」

「……っつ」

「文句があるなら一人で来りゃいいんじゃないかねえ？」

「……」

「それに、浅見は自分の知らないところで守ってもらってたって知ったらどうするだろうな。あいつ、こういうの許せない質だぜ」

その言葉が決定打になったのか、気まずげに志信から顔を逸らした男たちが我先にと立ち去っていく。

(……結局、助けてもらったってこと？)

言い方はともかく、今の志信の状況を救ってくれたのには間違いない。ゆっくり階段を上がってくる加瀬を待ち、ちょうど同じ高さに立ったところで志信は礼を言った。

「ありがと、助かった」

素直な気持ちを伝えたつもりだったが、なぜか加瀬は苦々しい表情になる。最近こんな顔をよく見かけるなとぼんやり考えていると、加瀬はわしゃわしゃと自身の髪をかき混ぜて呟いた。

「……二度目」

「え？」

何が二度目なのだろう。首を傾げると、加瀬は今度は早口で言い切った。

「俺に礼を言ったのがだよ！ ……お前さ、何考えてんの？」

「何って……」

前は、志信と浅見のことを気にかけてくれたことが嬉しくて、思わず礼を口にしていた。今回は、暴力をふるわれることはなかったかもしれないが、数のプレッシャーに圧倒されそうなところを助けてもらったので感謝した。

二回とも志信にとっては当たり前の理由で、改めて加瀬に理由を問われても反対に戸惑ってしまう。

「別に、そうしたかったからで……」

結局そう言うしかなかった志信に、加瀬はしばらくして大きな溜め息をついた。どうやら呆れているらしい。

「お前、馬鹿だよな」

「はあ？」

「……浅見も、そんなところが気にいってたはずなのにな」

付け足すように呟いた言葉に志信がハッと視線を向けると、加瀬は微妙に視線を逸らしながらもこちらを見ていた。

本文 p79～84 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>